

水戸市は人口約27万人を有する茨城県の県庁所在地で、現在の中心市街地はJR水戸駅北側の台地状のエリアに形成されている。江戸時代の頃、水戸城は那珂川とその支流の桜川によって浸食された舌状台地の先端に位置し、台地の続く西側に武家屋敷（現在の三の丸、南町、宮町、大町など）や町屋（現在の泉町、大工町、金町など）などの城下町が広がっていた。

治水と新田開発

当該台地は馬の背状に狭かったため、現在の水戸駅の南東側の低湿地帯で埋め立て造成工事が行われ、新たな城下町が形成された。以来、台地部を「上町」、低地部を「下町」と称し、水戸城下町は上町と下町に武家地と町人地が存する双子町の構造となつた。下町のうち、武家地は現在の城東に当たり、町人地（通称、下市）は現在の本町一帯である。

治水と新田開発で功績を上げた伊奈備前守忠次の像（道明橋）

地形で昔から水害に悩まされていたが、水戸藩の手によつて、現在の原形を作った。

工事が完成し、延長12キメートルの用水路と千波湖の氾濫による

農村に対する治水対策を目的として、大用水路として重要な役割を果たしている。

風情漂う歴史ロードへ一体整備 下町を流れる備前堀

甦る水辺空間

も及ぶ水路が引かれ、約100メートルにもおよぶ農地に水が行き渡るようになった。その功績を称え、用水路には彼の名を取った「備前堀（びぜんばり）」の名が付けられた。その後の下町の発展に大きな影響を与えたのは言うまでも無い。

驚くべきことに、この水路は江戸時代から改修を続けながらも受け継がれ、現在も農

水辺は、とかく汚濁や荒廃など都市生活のひずみが端的に現れてしまった場所もある。春の時期にはシダレヤナギが植えられ、石灯籠とともに大変趣ある風景となつている。堀沿いにはシダレヤナギが植えられ、石灯籠とともに

残暑がまだ続くが、夕暮れに堀沿いを散歩すると、とてて鯉のぼりが泳ぐ姿が見られ、夏に行われる灯籠流しは地域の一大イベントとなっている。

また、夏に行われる灯籠流しは地域の一大イベントとなつていて、地域に大きな潤いを与えるものである。

近年、備前堀の歴史を後世に残すための整備事業が行わされた。單なる護岸の修復にとどまらず、魅力ある歴史ロードを目指して、沿道との一体

に当たる。下町は、那珂川支流の桜川や千波湖などの水辺に囲まれ

よつな那珂川沿岸の大規模な開発が行われた。工事の指揮を執ったのは、関東平野の治水や新

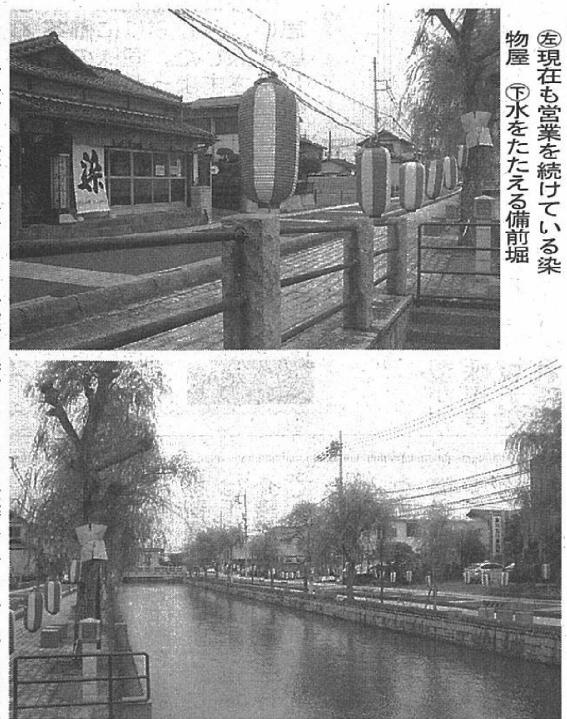
田開発に携わったことで有名な伊奈備前守忠次であつた。下町及び周辺部の

一般財団法人 日本不動産研究所

（左）現在も営業を続いている染物屋 下水をたたえる備前堀

～文化的歴史的所産を巡る～ 残したい情景

第18回 茨城県水戸市



植野裕高